

今は亡き三神忠氏。
お中元にと誂えた水雲
が「絶品」と捲し立てる

その彼女は、祇園町でも指折りの芸妓として知られる。襟替えなる符牒で呼ばれる舞妓から芸妓への儀式は、高台寺南門通に位置する料亭で執り行われ、僕も列座した。三神さんと相見える半年前。

成人を迎えたばかりの彼女は記憶力に長けていて、100名近い列席者の名前を瞬時に諳んじた。祇園町の世界を覗いてみたあゝい、と強請られて東都から同伴せし客室乗務員の名前をも。次はHちゃんの番、とお茶屋での三次会で、座敷芸に興ずる順番を指名する。干支は廻り巡って昨秋、三神忠・会津小鉄会理事の想い出を語り合う機会を得た。

鮮烈に記憶している。「和解」から大分して、高瀬川沿いの木屋町通を日曜の早朝に歩いていると、急停車した右ハンドルの独逸車の中から声が出た。「田中はん、何しとおん?」。ノートルダム女子大に通う相手と一緒だった。「何処の素人さんと悪さしとるか、全部、判つとるわい」。

と京都全日空ホテルでS氏が吐いた科白が甦る。

運転席には、三神さんだった。而して手前の助手席には、芸妓の彼女が坐っていたのだ。「僕ら、これからハワイですわ」。2人の接点は、と困惑する間も無く、彼は叫んだ。成る程、荷物室に入り切らなかつたのか、後部座席には大振りな旅行鞆トラバッキングが載っている。車は発進し、それが彼を直に認めた最後となった。

五条楽園は、大阪の飛田新地と同じ地貌の街だ。その一廓に、会津小鉄会図越組が事務所を構えていた。'87年11月30日、2階の大広間で三神さんと待つ。稍ややあって、男性2名が上がってきた。一人は40代半ば、今一人は20代前半。「色々とお迷惑をお掛け致しまして」。些か神妙な面持ちで僕が挨拶すると、後者が微笑した。彼は件の女子大生と、高校時代からの遊び仲間だったのだ。組長が琵琶湖に保有する船艇群が「ラルーナ」で、洛中らくちゆうの若者が車両の後部窓に好んで貼ちま付するステッカーの綴りも同一、との情報を僕に与えたのが誰か、先刻御承知であろう。

「判りましたやろ、田中はん。こうして御息は堅気の仕事に就いておりますんや」。三神さんの科白に続いて、向かい側に坐つた年長の人物が、KTMなる企業を自分は営んでいて、彼は社員なのだ、と口を開いた。逆に僕も、先刻承知だった。「京都土地問題」の頭文字である事を。

「土地本位制」なる泡沫経済華やかなりし時分ならではの呼称。

組長の子息と目が合う。お互い笑いを堪えるのに難儀していると、「以後、氣い付くと、田中はん」、再び三神さんに諭された。階下へと一緒に下りる、筈だったが、僕のみ靴を履くのに

時間を要し、既に3名は路地を歩いている。「三神さん」と叫べど彼らは振り向かぬ。頭髪を刈り上げた、相貌鋭き事務所詰めの男衆が僕を取り囲み始め、「み・か・み・さ・あ・ん」、消え入りそうな声を上げると、一人、彼の目が振り向き、「少し待って、そこで、迎えに行くよって」、と試練の時間を付与してくれた。

「上で、何い話とつたんや」、「御迷惑をお掛けした件を、お詫び申し上げました」、「お詫びい？ それ、どういう事やねん」、「ですから、僕の書いた文章で、会長と組長の御息に……」、「ややこしいわ。はつきり言わんかい、誰が間違つとつたんや」。歴代幹部の真影が掲げられた一室で、詰問が続く。

肘出しの姿勢で、半身を擦り寄せてくる。それは絶妙な手練しゅれんで、僕の体軀に触れはしなかつたのだと思う。今にして冷静に振り返ればの話。その時は精一杯だった。如何に凌ぎ切るかで。

如何程の時間が経過したのか、電話が鳴る。応対した1人の男衆が、顎あごを杓しゃくって僕に告げた。「もう、ええわ、早よお、行け。組長が呼んどのわ」。教えられた通りに路地を右左折すると、総檜造りの真新しい住居が見えた。

覚悟を決め、遣り戸を潜り、更に玄関の扉を引いた。「田中です、失礼します」と言うが早いか、ガラリと襖が開き、「いい勉強でっしゃろ、田中はん」と破顔一笑の三神さんが顔を覗かせた。「まあ、こっち、上がんなはれ」。先程の3名に加えて、過日は強持でだったS理事も、相好を崩している。

車で大阪に向かい、冒頭の日嬢と宿泊。翌日に帰京するや、東京プリンスホテル地階のPISAで、エルメス銘柄のティーカップセットを金額分購入し、京都へ配送の手続きをした。

その後も三神さんは、上京の度に連絡を取ってきた。これから出て来ませんか、と人懐こい口調で。時には赤坂プリンスホテルの客室から、時には住吉会幹部の御婦人達との酒席から。丁重に辞退申し上げ、すると正しく帰京後に、洛内の菓子や漬物が届くのだ。

僕は糸魚川の水雲を御盆に、安曇野の林檎を年末に、彼の自宅へとお送り申し上げた。「違いますなあ、日本の水雲は。田中はん、お目が高い。滑りも腰も絶品でんがな。家の小さい子供もチュルチュル、チュルチュル喜んで食べてますわ」。昂奮気味に電話口で捲し立てた科白を、今でも想い出す。

「仰山の弔問客だったですえ。祇園町だけやのうて、先斗町や宮川町、クラブのお姐さん方も」。お茶屋の一



何やら愉し気に語り合い、炬燵を囲んで蜜柑を剥く。然りとて、僕自身の緊張は未だ解れない。暫し後、奥の襖が開き、「ようこそ、お出でくださった。僕がラルーナや」と戯けた口振りで、心持ち小柄な男が登場した。圖越利次組長だった。袖無し羽織姿。恐らくは数々の「鎬」を経験して来たであろうに、そうした驕りを微塵も感じさせぬ。三神さん同様、相貌は紳士然としていた。

「訂正」に関して云々しない。仮に僕が切り出したとして、会津小鉄会の五代目会長を現在は務める彼は、「さて、何でしたかな」ってな具合に逸らしたのではなからうか。潮時を見計らって、僕が辞去を告げようとすると、ぼんぼんと手を叩き、すると乳飲み子を抱いた女性が、白封筒を持って現れた。

「僕の妻ですわ。美人でっしやるろ。それは本当だ。瓜実顔で柳腰。だが、目の前に坐っている御子息と、然して年齢が違わない。怪訝そうな面持ちを僕がしていたのだろう。補説してくれた。「おなごは若い方が宜しい。そうでっしやるろ」。而して、封筒を僕に差し出す。

受け取ってはいけない、と即座に感じ、その旨、告げた。すると圖越さんは、「これは僕の氣持や。お越し頂いて、手ぶらで帰て貰うたんでは申し訳が立たへん」と応ずる。猶も固辞しようとする、僕の目を見据えて呟いた。「田中はん、僕の氣持を無にする心算かいな」。断り切れぬ、と観念した。

先妻との間に三神さんが儲けた長女が、京都駅八条口へと送ってくれる。上りではなく下り列

室で、彼女は語り始める。無論、脇に控える舞妓は、三神さんなる人物を知る由もない。何故、
自裁するに至ったのか？ 僕は問うた。